

特集・進化を続けるラスベガス アルゼググループの海外戦略の一環 ウイン・ラスベガスホテルが開業



いわずと知れた世界最大のカジノ都市ラスベガス。特にこの数年は、日本国内でのカジノ創設機運が高まっていることもあり、以前より業界関係者の間でも、カジノが身近な存在として高い関心を集めている。中でも、カジノ市場の中心都市であるラスベガスはその最たるもの。常に新たなトピックスを発信し続けるこの街が持つ集客力は、他のカジノ都市の追随を許さない。そんな拡張を続けるラスベガスを象徴するカジノホテルが昨年4月28日、総工費約2700億円を費やしグランドオープンした。パチンコ・パチスロのみならずカジノ機器の製造販売に力を入れているアルゼが出資したことも知られる「Wynn Las Vegas (ウイン・ラスベガス)」だ。

世界最大級のリゾート

最寄りのマッカラン国際空港から車でおよそ15分ほど。目抜き通りである通称「ストリップ」を北に向かうと、太陽の反射を受けて輝く、巨大なプロンズ色の建築物が目に見え込んでくる。明らかに他のホテルと一線を画したシンブルな外観が醸し出す高級感、見る人の目を奪う。

「ウイン・ラスベガス」の構想は、2000年。「ミラージュ」や「ベラージオ」、「トレジャーアイランド」など名だたるカジノホテルをプロデュースし、現在のラスベガス発展の礎を築いたといってもいいスタイブ・ウイン氏が、生涯の集大成として計画したのが始まりだ。その熱意に賛同したのが、以前からカジノビジネスに関心を寄せていた遊技機メーカーのアルゼだ。まずは、2000年ウイン氏が会長兼CEOを務める「ウイン・リゾート・リミテッド社(WRL)」に2億6000万ドルを出資、さらに2年後の2002年4月には1億2000万ドル、同年10月には7250万ドルを追加出資し、真の大人の社交場を創出する共同作業がスタートした。

開業は、計画から5年が経過した2005年の4月28日。総工費約2700億円をかけ、総敷地面積87万平方メートル、50階建てという巨大カジノリゾートホテルを誕生させた。部屋数は2716室、そのうちスイート、グイ



約1万平方メートルの敷地を有するカジノスペース



設置比率こそ3割足らずだが、最近の人気は「ビデオスロット」と呼ばれる全面液晶型のスロットマシン(写真上)だ。下の写真は、ビデオスロットの中でも幅広い客層に人気を誇るスターウォーズをモチーフとしたビデオスロット。ビデオスロット全体に共通している特徴は、1、5、10、20、30ラインなどといった多くの有効ライン数を選択できるほか、1ラインあたりの掛け金と最低投資単位が選択可能な点だ



5年ほど前から、「イージーペイシステム」と呼ばれる金券での払い出しが浸透し、今ではラスベガス中ほとんどのスロットマシンでこのシステムが採用されている(写真上)。カード型のルームキー(同下)は、そのまま、プレイ時の会員カードとなっており、プレイ中特定の挿入口に、カード

を差し込みプレイする事でポイントが加算。そのポイントによってキャッシュバックなどの特典を受けることができる



写真は、VIPルームにあるハイローラー向けのスロットマシンで機種名は「ダブルダイヤモンド」。左からミニマム(最小)掛け金の単位が5000ドル、1000ドルとなっている。同機種はリールを搭載した「メカスロット」の中でも設置台数も多く、1ドルから楽しめるレートも用意されている。ちなみに1ドル、2BETタイプの同機のスペックは、1600枚の払い出しが4万6656分の1で当選。640枚(抽選により最高3000枚)の払い出しが3400分の1、100枚から200枚の払い出しが600分の1の確率で抽選される。ベースはおおよそ78%と比較的高め

2500台の監視カメラ

多額の現金が動くということもあり、セキュリティ対策には厳重な体制を敷いている。日本のホールでも、事務所内に数多くのモニターを設置し、日夜セキュリティには、多くの労力とコストを費やしているが、やはりその規模は桁違いだ。

特徴的なのは、まずエレベーターや通路など、ホテル内の一般共用部を監視するセキュリティと、カジノに特化した監視を行う部署というように、それぞれ独立した部署に分けている点。そして、一般監視に1500台のカメラ、

ラを351室設け、カジノスペースは約1万平方メートル、テーブルゲーム137台、約2000台のスロットマシンを揃えた。置かれる家具も独自にデザインチームを設け作成したオリジナル。こだわったシューズやマットレスなど、ハード面での充実度も高い。

また、カジノ以外の娯楽として、ホテルに隣接するゴルフコースや、プール、高級レストラン、ブランドショップ、さらにラスベガスでも高い評価を得ているショー「ル・レーブ」など、エンターテイメントにも力を入れており、ホテルを満喫するためのリゾート施設が多数設けられている。

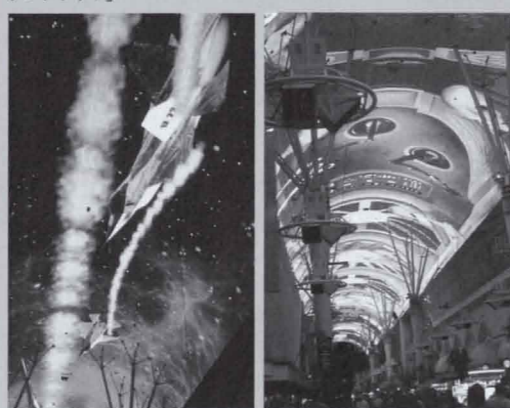
なお、開業日の4月28日は、ウイン氏の夫人の誕生日。こんなところにも大人の社交場を目指した氏の粋な心遣いが効いているといえるだろう。



およそ10分弱、通りを覆うアーケードが即席の巨大ビジョンになり、見るものを圧倒する光と映像の演出が展開される(写真・上/右/最右)。最上の写真はショーが始まる前のアーケードの様子



スティーブ・ウィン氏のカジノ運営の出発点となったカジノ「ゴールデンナゲット」



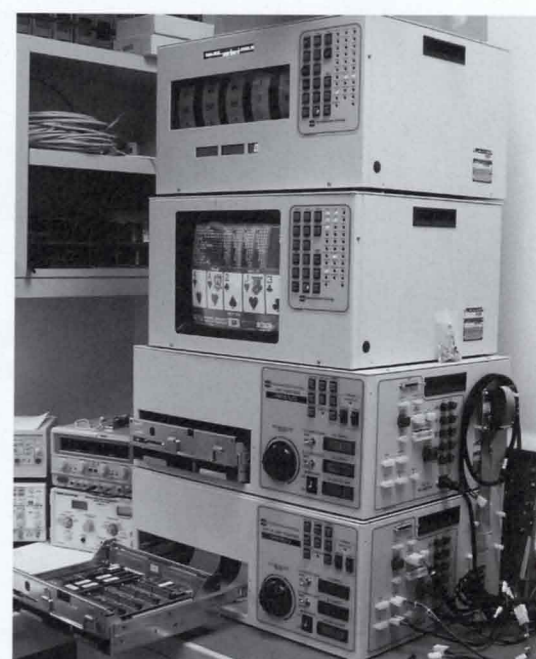
◆復活するダウンタウン

メインストリートであるストリップから北へ車で15分ほど向かったところにあるダウンタウン。ストリップとはガラリと変わり、日本風といえば「下町カジノ」ともいえる雰囲気だ。そんなダウンタウンも、大資本による巨大カジノホテルがストリップに乱立し始めた90年代初頭にはそのあおりを受ける形で厳しい時を過

ごしてきた。しかし、地元の商工会が手を携え、およそ7000万ドルを投じてアーケードを巨大スクリーンにするというアトラクション「エクスベリエンス」を95年に完成させ、ダウンタウン復活のろしを上げた。
設置されている機種は大手カジノと大差はないが、その多くで少額から遊べるレートが用意されており、年輩層や一般旅行者からの支持を集めている。



日本のパチンコホールではちょっと考えられないのだが、同ホテルの特徴的な施設に、故障したスロットを修理する「スロットリペア」と呼ばれる部署がある。この言葉通り、独自で技術者を抱え、スロットの故障を直すセクションだ。ほとんどのホテルでは、機械が故障した際、メーカーに修理を出すため、このような部署を自前で用意しているのはラスベガスでも珍しいという。ここでは、基板のチェックから機動部の修理、修理後のシミュレートなどを一括して行う。ただ、基板に関しては不正がないように一台一台異なるIDチップが搭載されているうえ、抜き打ちで審査機関のチェックが入るため、カジノ側での不正はできない仕組みになっている。修理箇所としては、依然と多かったホッパー周りのトラブルが、金券で払い出すシステム移行により無くなった一方で、ネットワーク関連のトラブルが増えているという



上の写真はIGT製のテスター。現在ビデオポーカーのテストが行われている最中だ。下の写真は、バリー社製のメカスロットのテスター。少しわかりにくいかもしれないが、透明色のリールに0から21まで22箇所分の数字が記してある



多くの部品が常にストックされている



ある。同ホテルに限らず、世界中のカジノホテルがこのハイローラの獲得に向けやっきになっており、そのターゲットとして、最近台頭してきているのが中国からの観光客だという。
「5、6年前から徐々に増えだしている」(ウイン・ラスベガス・佐藤敏子日本マーケティングエグゼクティブディレクター) ことから、中国客を対象とした集客には、競合ホテルの例に漏れず一際力を注いでいる。
その証拠に、1万ドル以上のデポジット(預り金)を必要とするVIP専門の接客係も、ラテン系8人、日本人が5人、韓国系3人を待機させている一方、中国系のそれは15人と、力の入れようが伺える。中国からの観光客が好むバカラのトーナメントイベントなども随時開催し、集客を図っている。
売上状況から見てもその傾向はわかる。同ホテルのカジノ売上比率は、テーブルゲーム2に対しスロットマシン1の10分の1にも満たないテーブルゲームだが、売上に対する貢献度は高い。これもまた、ハイローラーが好むテーブルゲームで費やされる金額の多さを如実に示している。

また、これは筆者の感想だが、同地を訪れた時期が、旧正月と重なっていたこともあり、どのホテルでも旧正月を祝う垂れ幕などの装飾が施されていた。シーザーパレスと繋がるショッピングセンター「フォーラムシヨップ」で行われた旧正月を祝うイベント
では、ラスベガスのグッドマン市長が自ら祝辞を述べるなど、町ぐるみで中国市場獲得を狙う意気込みを感じさせていた。さらにいえば、先述したバカラテーブルなどは、夜になると空きテーブルが無くなり、客があぶれるという状況が頻繁に発生している。これも主に中国圏からの観光客増加を背景としたものであり、その傾向は今後も拡大していく気配を見せている。
また、一方の日本からの観光客だが、バブル崩壊以降減少を続け、今やちょっと止まりをみせ安定しているという。しかし、国内航空会社で唯一、ラスベガス直行便を運行させていた日本航空は同路線から今年撤退することを決めている。

進化するラスベガス

90年には25万人強だった人口が、この15年余りで180万人を抱える大都市に変貌したラスベガス。世界を見渡しても、まれにみる驚異的なスピードで都市としての規模を拡大しているといえるだろう。今でも、毎月3000人から5000人が移住してきており、数年後には人口200万人を突破する勢いだ。その人を引きつける最大の魅力は、次々と新たなトピックスを生みだし、町全体が常に進化し続けているという点にある。そして、今回開業した「ウイン・ラスベガス」もまた、ラスベガスにこれまでにない新たな息吹を吹き込む役割を果たしたといえるだろう。

(編集部・坂内)

拡張する中国マーケット

開業以来、常時4000人ほどが宿泊しているという同ホテル。客室稼働率はすこぶる良好だが、当然収益の柱はカジノ。訪れる客数もさることながら、ポイントとなるのはその客層だ。そのカギは、高額の資金をカジノに投資するハイローラーと呼ばれる客をどれだけ囲い込みできるかという点に

カジノ監視には1000台、計2500台ものカメラが24時間体制で稼働している。ただカジノ側の監視スタッフは、不審者を追跡するため、一般部のカメラを操作することができると、上部組織として位置付けられている。さらに、カジノの監視部署は、入口に静脈認証によるセキュリティシステムを設けるなど厳重だ。監視室内は、どちらも大小20画面ほどのモニターに囲まれ、さながら司令室ともいえる雰囲気醸し出している。
映像の保存期間は基本的に7日間だが、大口顧客が専用のプライベートルームなどで行う巨額なやり取りとなるプレイについては90日間保存される。
運用は、各セクションとも、それぞれ4人が交代で常時モニターに張り付く形だ。そのうち、カジノ側の監視セクションには、500ドル以上の勝負が行われる際、テーブル側から情報が送られる体制になっており、その結果、カジノ内で動く金額の80%~85%が把握されているという。